

時論の記事を読んで

西涼音

佐世保市で起きた少女の殺人事件について、私は「自分」の知らないことをたくさんあるんだなと、改めて思つたし、何ともいえない懇しき気持ち

の江川紹子さんとの時論を読んでみると、加害者の少女が「これまでにならず前に、何か止め方法がある」と思いました。実の母が七くな

たのではないかと感じました。

この時論を読んで、いかに止める方法があるのか

になりました。

Y. 一人暮らしだった彼女の気持ちは、経験したことの無い私には計り知れぬいものだし、つらいといふ言葉だけでは失礼のような気もします。父親や周りの大人も何もしていません。父兄や周囲の大人も何もしてあげていれば、もしかしたら彼女は立ち直れていたかもしれません。また、地域との協力が大切なんだと改めて思います。また、地域

と松田ちと隣りのある人たちはたくさんい
るし、その方達が積極的に動いてくれた
おかげでくれたりすると、すごく心強いと思いま
す。仕事だから、といふ表面上のことだけ
ではなく、この事件の生徒のよう何かを抱え
ている子がいるかも知れないから、一人一人
から目を背けないで心と心で接し合えるように
な地域が作れればいいと思います。私も、そ
んな地域に貢献できるような大人になりたい
です。

私がこの記事を読んでもう一つ心に残った
のは、加害者家族も苦しんでいます。といふこ
とに残った
とです。ニュースなどを見ると被害者家族の取
扱いを、かれいそくと思っていつも見ていま
したが、加害者の家族のことは参考にしました
ありませんでした。私の記憶にも残った
葉原の無差別殺傷事件の被告の弟が自殺
いたと知って、とても驚きました。ニュース
で流れくる情報だけではなく、その中にはた
くさんありますし、正しいかも分からぬとい
うことはたくなっています。秋あ

をその家族に3つけるのはおかしいと思いま
す。それで一つの命が奪われてしまふのは、
あつてはいけないことをです。事件に關係する
人は、マスコニや世間だけではなく、いろい
な面から苦しんで日々戦つていろんだな、
と思いました。

この事件の少女が友人を殺すまでにならま
で何があつたのか、どんな気持ちだつたのが、
また、加害者や被害者の家族の思いや苦しみ
など、経験したことのない私は、まだ具体的

には良く分かりません。経験しないことが一
番いいことだと思ふけど、だからといふことか
れに關係ないことをと思うのは違うと想い
残された家族に対する偏見を持たないといふこと
と理解しようとするなど、次の犠牲者を出さ
ないようになります。また、張り合い事
件自体を起こさないで済みます。

せること、学校に両親二人と、家族みんなで過
ごとに感謝しなければいけないんだな、とい
います。今、両親二人と、家族みんなで過
ごとに感謝したこと、学校に両親二人と、家
族みんなで過ごします。

記事を読んで思いました。彼女の思い、その友人の死を無駄にせずには、これからに生かしていってほしいと思ひます。私も、この事件を忘れてはいけないと思うので、この記事を書むことができてよかったです。

時論

JIRON

江川 紹子



経済学部卒業。神奈川新聞記者として勤務した後、フリーランスに。えん罪や災害、カルト、教育などさまざまな社会問題を取材。著書に「人を助ける仕事」(小学校館文庫)、「勇気ってなんだろう」(岩波ジュニア新書)など。東京都出身、56歳。

長崎県佐世保市で、15歳の高校1年生の少女が同級生の女の子を殺害した事件には、大きな衝撃を受けた。私以外にも、多くの人が、10年前にやはり佐世保市で起きた小学6年生の女児による同級生殺害を思い出しだろう。今回の事件発生直後には、前の事件後に行われてきた「命の教育」への疑問を投げかける報道が相次いだ。

だが、今回のケースは(そして、おそらく前回の事件も)、「教育」の問題ではないだろう。少なくとも、「教育」だけの問題ではないはずだ。

被害者は優しい子で、人付き合いの少ない加害少女にとって、ほとんど唯一の友だちだった、といふ。それだけに痛ましさが募る。

少女の殺人 冷静に検証を

からこそ、病院への入院を打診した。それが事件の直前。ところが、病院側の事情で受け入れられなかつた、という。ここで医療の積極的な対応があれば、と悔やまれる

と前から何らかの兆候があつたかもしれない。実母が亡くなっていることから、調査は簡単ではないだろうが、彼女の生育歴を調べ、どの時点で、誰が、どのような

ことがわかった。ジャーナリスト。早稲田大政治経済学部卒業。神奈川新聞記者として勤務した後、フリーランスに。えん罪や災害、カルト、教育などさまざまなお題目を取材。著書に「人を助ける仕事」(小学校館文庫)、「勇気ってなんだろう」(岩波ジュニア新書)など。東京都出身、56歳。

加害少女は、実母や父親も殺そうとしていた、という。犯行の動機は、憎しみや怒り、トラブルを契機にした衝動的なものといった、私たちが理解可能なものではなさそうだ。その心の闇の深さを感じざるを得ない。

これに対し、周りの大人は何もしていなかつたわけではない。家族も娘の異常さに切迫感を抱いた

ただ、この差し迫った状況が、突然現れたわけではない。小学校時代に給食に異物を混入するなど、サインはあつた。あるいは、もつて、家庭、学校、医療機関、行政、警察などが、どのような連携をすべきなのか、役所や機関の壁を越えて話し合わなければならぬ

が、果たしてそれで根本的な解決につながったのかは不明だ。

父親は、事件前日に県の児童相談窓口に電話をしていたが時間外だとして、後日相談することになった。対応は間に合わなかった。

ただ、この差し迫った状況が、突然現れたわけではない。小学校時代に給食に異物を混入するなど、サインはあつた。あるいは、もつて、家庭、学校、医療機関、行政、警察などが、どのような連携をすべきなのか、役所や機関の壁を越えて話し合わなければならぬ

関与をすべきだったか、きちんと検証してもらいたい。

囚(刑死)の父親の元には、全国から多くの非難の手紙が送りつけられ、父親は結局、自殺に追い込まれた。

秋葉原無差別殺傷事件の加藤智大被告の弟も、自ら命を絶つている。彼は、書き残した手記の中で、「被害者家族は言つまでもないが、加害者家族もまた苦しんでいます」と述べ、その苦しみは被害者サイドのそれとは異質のものであることへの理解を訴えた。

このように、加害者家族を追いかけて、事件の犠牲者を増やし、悲劇を拡大するようなことはないようにしたい。そのうえで、今度こそ、私たちの社会は今回の犠牲によって投げかけられた課題を、しっかりと受け止めなければならない。

中で、責任者探しをしたり誰かをたたいても意味がない。それより、針のむしろ状態にある加害者家族に対しても、適切なサポートが必要だろう。

次回は9月7日、早稲田大大学院教授の北川正恭氏です。